

加藤のコラム

第17号（2017年7月）



日本の自閉症支援をリードしてくださった佐々木正美先生がご逝去されました。その存在があまりに大きく、支柱を失った感じがしております。謹んでお悔やみ申し上げます。

さて、昨日、東京で会議があり、日帰りで弾丸出張してまいりました。最高気温が34度、モワッとする暑さが満開でした。電車で移動していると、仕事中のサラリーマンの方々が汗をぬぐいながら疲れたような表情で乗り込んでこられます。暑い中歩き回っているのですから、そりゃたい

へんです。その中で、たぶんボクと同じかちょっと上くらいの年齢と思われるサラリーマンの方が乗ってきて、カメラをぶら下げておられた初老の外国人男性の隣のあいている席にどかっと座り、大きなため息をついておられました。「こんな日の外回りはきついだろうな」と思いつつ、しかしながらその方のかなりくたびれた様相に「オレも人からはこんなふうに見られているんだろうな」と気になってしまい、その方の様子をチラチラと目で追っていました。くたびれた様相のその男性は、カバンから手帳を取り出しては何度か首を振り、何やらささやくようにひとりごとを言い、そしてまたため息をつき…。隣の外国人男性からすれば、「ニホンジン、トッテモツカレテルネエ」と思ったことでしょう。少なくとも国際的な好感度としてはよろしくない印象をふりまいていました。

ところがですね、ふいに隣の外国人男性に「Too Hot！（発音はホットじゃなくてハットみたいな感じだった）」と話し掛け、何やら会話を交わし始めたのであります。発しているのは二語文くらいでしたが、ヒアリングはできていて、外国人男性も笑顔になり、一気に好感度上昇であります。ボクはこの後電車を降りたので、その先どんなやり取りが進んだのかはわかりませんが、その男性に「グッジョブ」と心の中で言うておりました。

同年代としてうらやましいですね。何がうらやましいかと言えば「意外性」です。英語なんてできそうな雰囲気を出さずに英語を使っているという意外性。見た目はくたびれてきているけれど、実はくたびれていない武器を持っていたという意外性。「いい年の取り方をして年齢を重ねたい」と常日頃思って生きておりますが、この意外性もいい年の取り方のひとつなんだなと気付くことができました。

じゃあ、ボクの意外性って何があるんだろうと考えたら、これがない。何もなし。

英語はできないし（スピードラーニングは効果ゼロだった）、バク転できないし（後転しかしたことがない）、将棋うまくないし（コマは動かせるけど）、楽器もできないし（でかい声で歌うくらいしかできない）、手品もできないし（できそうな気もしない）、アートのセンスも全くないし（絵心ない芸人とそんなに変わらない）、おしゃれもできないし（服は着ていけばいいというレベル）…。どんな意外性を武器にするか、これが今後の人生の目標に加わりそうな気がしてきました。まずは意外性のターゲットを見つけるところからですけどね。

文責：加藤 潔